07年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

	数量										
	漁獲		産地					輸入			輸出
年	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ 生	スルメイカ 冷近	スルメイカ 冷遠	アカイカ 生	アカイカ 冷	マツイカ	コウイカ	調製品イカ	イカ
18	190.3	37.8	41.2	53.0	6.3	0.0	15.0	65.9	28.1	47.4	10.7
19	254.4	18.3	83.4	50.5	2.5	0.6	4.2	77.1	26.0	49.8	14.3
%	134	48	202	95	40	2900	28	117	93	105	133

	数量										
	東京			在庫量			消費支出	加工品			
年	スルメイカ 生	スルメイカ 冷	甲イカ 冷	スルメイカ	コウイカ	その他	生（グラム）イカ	イカ製品	イカ塩辛	干スルメ	燻製
18	11.7	3.8	1.2	41.0	9.3	5.6	3,045	46.351	23.8	10.45	7.88
19	13.7	3.4	1.1	45.5	9.3	2.9	3,158				
%	116	90	90	111	100	53	104	0	0	0	0

	価格											
	産地					輸入		輸出	東京			消費支出
年	スルメイカ 生	スルメイカ 冷近	スルメイカ 冷遠	アカイカ 生	アカイカ 冷	マツイカ	コウイカ	イカ	スルメイカ 生	スルメイカ 冷	甲イカ 冷	生（円）イカ
18	240	252	201	103	203	441	702	172	465	357	524	2,972
19	159	233	198	134	334	406	812	151	430	329	656	3,003
%	66	92	99	130	165	92	116	88	92	92	125	101

スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しており、本年もその水準の中での漁獲であった。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群（冬季発生系群）の資源量は、1980年代の終わりから増加傾向を示し、1996年には134万トンに達した。しかし、1997年以降は経年差が大きかった。2007年の資源量は2006年を23万トン上回る86万トンと推定され、2001年並みの水準であった。親魚量は資源量と同様に1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には最大の47万トンに達した。しかし、1994～1999年は経年差が大きかった。2007年級を産んだ親魚量は前年度を7万トン下回る25万トンであった。現在の冬季発生系群の資源水準は中位と判断し、資源動向は2003～2007年までの5年間の傾向から横ばいと判断されている。

主に日本海（対馬暖流系）で漁獲の対象になる秋生まれ群（秋季発生系群）の資源水準は、1970年代後半から減少傾向にあり、1980年代は主に50万トン前後で推移、1986年は22万トンに減少した。1980年代後半以降は増加傾向となり、2000年前後には約150万～200万トンとなった。近年は再び減少傾向となり、2007年の資源量は91万トンと推定された。漁獲割合は1980年代に資源量の減少と共に上昇し、1980年代半ばには35～40%となった。その後は資源量の増加と共に減少し、1990年代は30%以下、近年は20%前後であった。なお、スルメイカの資源量は中長期的な海洋環境の変化によって変動すると考えられ、1990年代以降の資源の増大は、海洋環境がスルメイカにとって好適な状態に変化したためと判断されている。

産　地　水　揚　量　と　価　格

19年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）は生8.3万トン（前年4.1万トン）、冷5.1万トン（前年5.3万トン）と生鮮は倍増、冷凍はやや減少した。

ＴＡＣに基づく漁業種類別漁獲量はトロール4.4万トン（前年2.3万トン）、まき網1.3万トン（前年0.5万トン）、釣りの生鮮が7.3万トン（前年5万トン）、釣りの冷凍4.9万トン（前年4.8万トン）であったが、トロールとまき網が目立って好漁で、釣りは生鮮（小型船）が好調、凍結船も昨年並みを維持した。

冷凍は、本年も昨年同様北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）と日本海に分かれての操業であったが、赤イカは前年度漁期の最終航海が極めて低調に推移したが、年度明けの初航海の漁初期が好調であった。しかし、秋から冬場の漁は昨年同様極めて低調に推移した。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海10,630トン（前年10,577トン）、太平洋68,896トン（前年28,457トン）、オホーツク0トン（前年0トン）で、特に太平洋で大きく増加したのが特徴である。また九州北部での漁獲も3,912トンで前年(2,217トン)をかなり上回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、今年も概ね日本海操業が主体で日本海でのスルメイカ漁は前年並みで順調であった。

また本年も業界では、従来からスルメイカ一極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進、アカイカの高度利用等の指導は本年も続いた。

産地価格は、生鮮159円で前年（240円）、冷凍は233円で前年（252円）となり生鮮が大量水揚げで下落、冷凍も生の影響を受けて下落した。

本年の特徴は、①本年は冷凍スルメイカは水揚げがやや減少したが、１隻当たりでは若干増加している、②本年の冷凍スルメイカ（Ｒ）のサイズ組成は、21～25尾サイズが24%で前年（34%）をやや下回り、26～30サイズも24%で前年（21%）をやや上回り、サイズ組成も20尾以下は13%で前年（20%）よりかなり少なく、全体的に小型化が目立った、③ＡＲ，ＦＯＲ、ペルー水域等、海外でのイカ類はペルーアカイカが船数の減少もあり前年の半分に留まり、マツイカは操業船が無くなった、こと等である。

在　庫　量

19年は昨年より少ない5万トンの在庫から始まり、本年も例年通り6,7月に最低になったが、その数量は昨年並みの3万トンであった。その後、秋以降の生漁の水揚げが好調で、差燻煙以上にまき網やトロール漁も伸び、在庫もやや膨らんだ。この結果、越年在庫は6.8万トンと近年では最も多い在庫となった。したがって平均在庫量も、4.6万トンで、前年（4.1万トン）を上回った。

消　費　地　入　荷　量　と　価　格

スルメイカの東京消費地入荷量は、生1.4万トン（前年1.2万トン）、冷凍3.4千トン（前年3.8千トン）であった。本年は太平洋生イカ漁が好調であったことで生鮮の入荷が前年を上回った。　価格は、生430円(前年465円)、冷329円(前年357円)で生・冷とも下げた。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも前年を上回った。

ＮＺイカ

19年のＮＺイカ釣漁は、本年は２隻、1.1千トンで前年（４隻、1.9千トン）をやや下回った。

産地水揚量（全漁連）は、1,421トンで前年（2,340トン）を下回った。

価格は195円で前年（194円）並みであった。

ＳＷＡイカ

19年のＳＷＡマツイカ釣漁は、ＡＲ０隻（前年5隻－9.3千トン）、ＦＯＲも0隻－0トン（前年0）、SA公海0隻―0トン（前年0隻）であった。

何れの海域も操業船は無かった。

産地水揚量（全漁連）は、564トンで前年（3,217トン）を大幅に下回った。

価格は199円で前年（217円）をやや下回った。

アカイカ

本年も初漁期に好調であったが、その後秋から冬にかけては昨年同様極めて低調な漁模様であった。総じて中型船による近海操業は近年でも最低の漁となった。また沖合（東経170度以東水域）の漁は１隻当たりの漁獲が比較的好漁の部類に入る９１トンであった。小型船の漁獲は昨年の21トンに比べると多い577トンの水揚げとなったが、低水準に変わりはない。なお、大型船（沖合操業）は3隻0.1千トンで、前年（4隻0.3千トン）を大きく下回った。

全漁連集計によると、生577トン（前年21トン）、冷0.4万トン（前年1.5万トン）であった。

産地価格は、生166円（前年68円）、冷331円(前年203円)であった。

アカイカは近年中国を主体とした諸外国からの製品輸入も年々多くなっている上に、水揚げの減少･低迷が続いていることにより、マーケットシェアも落ちているが、さすがに本年は極端な水揚げの落ち込みもあり、国内アカイカ市況は反騰した。

海外アカイカは、ペルーのみ(200海里内外)の操業であったが、夫々3隻-15.6千トン、1隻-0.2千トンで、昨年実績（6隻-36.6千トン、1隻-0.9千トン）を下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下98%（昨年は5尾以下が94%）と昨年以上に超特大サイズに偏り、ほぼ全品大型であった。

産地水揚量（全漁連）は、13,592トンでほぼ前年（34,207トン）並みであった。

価格は大幅な水揚げ減少を反映し本チャン同様反騰し139円で前年（98円）を上回って推移した。

輸入イカ

19年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に7.7万トン前年（6.6万トン）を引続き増伸傾向にある。

価格は、このところ上昇が顕著であったが406円と前年（441円）をやや上回り、16年並みの水準まで下がった。

冷凍イカの主要輸入国は、中国30,144トン（前年28,877トン）、タイ8,116トン（前年7,635トン）、ベトナム6,818トン（前年7,064トン）、米国5,475トン(前年4,626トン）、フィリピン638トン（前年967トン）、インド1,047トン（前年1,940トン）、NZ3,345トン(前年1,436トン)、ペルー7,735トン（前年4,842トン）、アルゼンチン10,421トンで（前年5,648トン）相変

わらず中国のシェアが高かったが、大型船が撤退したＡＲ海域のマツイカ、アカイカ関係でアルゼンチンやペルーからの搬入も増えている。

19年の輸出は、1.4万トンで国内漁の好調に推移したことで再度輸出も増え、前年（1.1万トン）をかなり上回った。

モンゴイカ

19年のコウイカの輸入は、2.6万トンで前年（2.8万トン）を引続き下回った。

輸入価格は、812円で前年（702円）を上回った。

東京消費地入荷量は、1.1千トンで前年（1.2万トン）を下回った。

価格は、656円で前年（524円）を輸入価格の上昇もあってやや上回った。